



イェルク・ヴィトマン (2023.3.13) © 松尾淳一郎

TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2026 1909年製ベーゼンドルファーとの邂逅

山根一仁(ヴァイオリン)／嘉目真木子(ソプラノ)／川口成彦、兼重稔宏(ピアノ)

[Interview] 川口成彦&兼重稔宏

ジャン＝クロード・ペヌティエ (ピアノ)

ペヌティエ、最後の調べ——心を打つ革新 梅津時比古

[Schedule 2025.11～2026.4]

[Information]

2025/2026シーズン主催公演[後期]発売日のお知らせ

ランチタイムコンサート Vol.137 特別企画 水野優也(チェロ)

瀬川裕美子 ピアノ リサイタル vol.11

Toppan Hall New Year Concert with 1909 Bösendorfer



Kazuhito Yamane

Makiko Yoshime

Toshihiro Kaneshige

Naruhiko

Artist Interview

川口成彦 & 兼重稔宏

この春、縁あってTOPPANホールにやってきた「1909年製ベーゼンドルファー Model 250」。ブラームスの没後からまだそう遠くなく、リヒャルト・シュトラウスがまさに活躍していたさなかに誕生したこの楽器は、音楽の都ウィーンの文字どおり中心で弾かれたのち、いまは舞台を日本へと変えて物語を紡ぎ続けています。2026年のニューイヤークンサートは、この特別なピアノを主役に据えて企画。以前からこの楽器をよく知り、今回の公演でもその魅力を伝えてくれる川口成彦さん、兼重稔宏さんに、楽器の得難い個性や公演への意気込みを語っていただきました。

— おふたりは東京芸術大学の同級生ですね。お互いの印象からお聞かせいただけますか？
兼重：川口くんは、全身全霊をかけて作品から魅力的な響きを掘り出すことに喜びを感じている、まさに「ナイスガイ」です。

川口：兼重くんは、音楽や芸術が本来持つ大事な部分をすごく大切にしている、それを模索し続けている人ですね。音楽への意識が似ているので、とても親近感をもっています。古楽器の魅力にも意識を向けてくれている人なので、個人的に嬉しいです。

— 今回「1909年製ベーゼンドルファー Model 250」(以下Model 250)を借り受けるにあたっては、兼重さんがキーパーソンのおひとりでした。

兼重：ベーゼンドルファーのサロンにはときどき練習に通っていて、あのピアノのことは以前から知っていました。あるべきところにたどり着いたな、と思いましたね。触れるたびに「こんなこともできるんだ!」と、気づきやインスピレーションを与えてくれて、もっとたくさんの人に聴かれるべき素晴らしい楽器だと感じていたので、それを理解してくださるお客さまのいるTOPPANホールで弾かれることになって、本当に嬉しいです。

— スタインウェイとベーゼンドルファーは最高峰のピアノとして比較されることが多いですが、それぞれの魅力をどうお感じですか？

兼重：本質的なことをいうと、ピアノの差とは楽器の個性差で、つまりは楽器をつくった人の個性がいちばん大きな要素だと思っています。本当にいい楽器というのは、メーカーは関係ないのかもしれない。それでもあえて違いを挙げるなら、スタインウェイは全音域でバランスのとれた音色が魅力。イメージしたことがなんでもできと思わせるような期待感、好奇心をそそられるところがあります。一方ベーゼンドルファーは例えるなら、苦手意識を感じていた人でも友人として打ち解けると、その後は長く友情を育んでいけるような…そんな感じに近いところがある。「予想と違う答えが返ってきても、それに耳を傾けたら何かポジティブなことが起こるかもしれない」…そんな風に思わせるのがベーゼンドルファーです。

川口：楽器も時代を経るなかで、新しく生まれてくるものは素材や作り手の変化を否応なく受けますよね。僕は古楽器を通じて日常的に楽器の歴史をたどっていますが、共通して言えるのは、どの楽器も、その楽器が生まれた時代を映した個性を持っているということです。スタインウェイもベーゼンドルファーも、最近の楽器はやはり「いまの音」がすると感じますね。

— それに照らすと、Model 250は20世紀初頭を映した個性を持っているということですね。

兼重：そのとおり、まさに音に時代性を感じます。あの時代に生まれたからこそ出てくるのだろう響きが、なんと素晴らしい。第一次世界大戦がはじまるころ、いまとはまったく違った価値観のなか、ウィーンにおいて芸術がとても大切にされていたことも響きから伝わってくる。ウィーンらしい柔らかさと、どっしりしたボディならではの奥行きある響きが、実に特徴的で味わい深いです。

川口：Model 250に初めて触れたのはベーゼンドルファーのサロンで、「なんだこの音色は!」と衝撃を受けたのを覚えています。室内楽的なニュアンスがインペリアルとはまったく違って、シューベルトがシューベルトティアードで演奏していた時代のテイストをすら感じました。室内楽ならではの、お客さまに語りかけるような距離感や、絶妙な表現のニュアンスにこだわりたい楽器ですね。古い楽器は、当時の地球環境を反映して年輪が細かい木材でつくられていることがあり、音色に素材からくる密度の高さや独特の香りが感じ

られます。Model 250も、誕生当時の素材のポテンシャルが、音の佇まいから非常に伝わりますね。

— この時代の楽器はまだ、製作した職人の顔が見えてくるような印象もあります。Model 250をTOPPANホールで弾くことの面白さについてお聞かせください。

兼重：TOPPANホールでは演奏者と聴き手、両方の立場を経験していますが、どちらであっても、音楽との親密な距離感を楽しめるホールですね。Model 250の持つ時代性ともマッチした空間は当時のサロンのようでもあります。この楽器にはまだ解き明かされていない部分が多く、神秘的なものが感じられる。今回はブラームスとリヒャルト・シュトラウスの歌曲を演奏しますが、楽器がつくられた1909年はブラームスの没後まだ12年、シュトラウスはまさに同時代を生きていた。ウィーン国立歌劇場で使われていたピアノですから、シュトラウスが弾いていた可能性だって大いにあります。その時代にどういうことが大切にされていたのかを、楽器が直接教えてくれる期待もあります。

— 一人の声との親和性も抜群に高い楽器だと思います。日本ではあまり知られていないかもしれませんが、兼重さんはヨーロッパではよく歌曲を演奏されていたんですね。

兼重：ドイツでは男声としてよくシューマンを演奏していました。歌曲演奏では、物理的に呼吸をしている歌手にあわせて、ピアノを呼吸させる感覚が何より大切。Model 250は柔らかい音色が持ち味で、木の温かみからくる豊かな呼吸が可能なので、確かに歌曲と非常に合うと思います。

— 今回は嘉目真木子さんと初共演です。

兼重：嘉目さんの歌は以前、北村朋幹くんとのコンサートで聴かせていただき、リリカルで清楚な歌声が印象的でした。Model 250とのコントラストでひとつの響きをつくっていくのが楽しみです。リート伴奏者という職業もステキだなと思うくらい歌曲が好きで、ライブツィヒではよく演奏していました。帰国してからはなかなか機会がなくて欲求がたまり続けているので(笑)、待ち遠しくて仕方ありません。作曲家ごとに違う音色が求められるので、その特徴を描き分けていけたらと思います。

— ソロでは、ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ第30番》を演奏していただきます。

兼重：ベートーヴェンの作品は後期になるにつれて、響きの内実により密度が要求されていきます。Op.109はModel 250の特徴である、ウィーンの香りと響きに内包された強さが活かせる作品だと思って選曲しました。第1楽章の、第1主題では軽やかさやハーモニーの美しさ、その香りと強さの対比を、第2主題では内側から捕まえる強さが表現できると思います。「下から積み上げていかないと多層的な響きが出ない」という楽器の特徴を意識しながら、バリエーションがどう変化していくのかに対峙したいです。響きの美しさについて飛びつくようになるのを我慢して、一音一音、下から丁寧に…密度の高い音楽を生みたいですね。

— 川口さんは、ヴァイオリンの山根一仁さんとの初共演。

川口：山根くんも古楽に関心があると聞いています。お互いを尊重しながら、それぞれの経験と価値観をディスカッションしながら融合させていけたらいいですね。どんな感じになるかな。

兼重：ふたりとも何をするのか分からないところがあるから、めちゃくちゃ刺激になりそうだね。

— ソロでは、シューベルトとショパンを聴かせていただきます。

川口：ショパンは8か月ほどウィーンに住んでいたことがあって、ウィンナワルツなどのカルチャーに触れています。ワルツを弾くとそのことを強く感じます。ユーモアのセンスもあった人で、《華麗なる大円舞曲》には彼の茶目っ気があふれている。弾いていると、舞踏会で貴



2026 Mode 250



1909年製ベーゼンドルファー Model250

ベーゼンドルファー・ジャパン（（株）ヤマハミュージックジャパン）所有。詳しい来歴は戦災による記録消失で定かではないが、当時宮殿のサロンコンサートで多く使われていたモデルで、本器はウィーン国立歌劇場で長く弾かれていた。ウィーン・ベーゼンドルファー社の提案により、2012年ごろ、オーバーホールののちに日本に輸入。1933年まで製造されていた92鍵タイプで、通常のモダンピアノより4鍵盤拡張されている。より深い倍音と、独特かつ重厚な響きを特徴とし、製造されてから116年を経たなお、ベーゼンドルファーならではのあたたかな「ウィンナー・トーン」を伝え続ける、貴重なピアノである。時代を超えて深まる希少性とその価値を、いっそう魅力的に、より広く届けたいという所有者の意向から、主催公演での多くの実績が評価され、今年6月からTOPPANホールに貸与されている。

Kawaguchi

婦人が踊る光景が見えてくるようです。実はいま、お芝居的な演奏解釈にチャレンジしていて、小さな喜劇を見ているような、想像力を掻き立てる演奏がしたいと思っています。《夜想曲第2番》はプレイエル夫人に献呈された作品。きっとパリのサロンで弾いていたでしょうから、そこに想いを馳せつつ、「ピアノの詩人」と称された魅力を表現したいですね。TOPPANホールは、ショパンがパリで初リサイタルをした300席のホールと規模感が近い。ロンドンでは900席ほどで、彼のデリケートな音がほとんど聴こえなかったという話が残っていますが、TOPPANホールなら、演奏者のこだわりがお客さまにダイレクトに届きやすいと思います。

—シューベルト《4つの即興曲集 D899》は、2022年のニューイヤーコンサートでも弾かれています。

川口：大好きで思い入れのある曲です。前はフォルテピアノでしたが、今回はモダンのヴィンテージのベーゼンドルファー。新たに作品と向き合って、この楽器にしか出せない音色を引き出したいですね。

—毎回違う楽器を演奏できるのは、ピアニストならではの楽しみでしょうか。

川口：そうですね。同じ作品でも楽器が変わると、テンポ感や音色の届けかたなど、作品が出来上がっていく感覚がまったく違ってきます。だからピアニストって楽しい。大変なときもあるけど（笑）。

兼重：ヨーロッパだと「今日これで弾くんですか!？」みたいなことも多いもんね。本番の2日前に鍵盤がとれてセロテープでとめられていたなんてこともありました（笑）。どこのホールでもクオリティの高いピアノが用意されているのは、日本くらいですね。

—2度の大戦を潜り抜けて、Model250が非常にいい状態でいまを迎えているのは奇跡かも知れませんね。多面的なプログラムを通して、きっと楽器のさまざまな個性を感じていただけたと思います。

川口：そういえば最近、複数の知人から「いま（第二次）ルネサンスが到来してるよ」と言われたのですが、既成の価値観があちらこちらで崩壊の兆しを見せているいま、コロナ禍も経た人間回帰の流れで、室内乐的なものに魅力を見出す潮流がきている気がします。

兼重：確かに、親密な空間で質の高い音楽を楽しみたい人は増えている実感がありますね。

川口：どのみち僕たちは、いい音楽を届けることに集中するだけだから。

兼重：AIにとって代わられないようにね（笑）。『クララとお日さま』（編注：カズオ・イングロ長編最新作）って知ってる？ AIが心を持つ話。

川口：面白そうだね。でも僕は、AIは本物の価値を上げるものだって、ちょっと前向きに考えてる（笑）。AIのおかげで、生身の人間が音楽をライブでやる価値は上がると思うよ。

（2025年9月取材）
インタビュー写真：藤本史昭／取材・文：TOPPANホール

TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2026
1909年製ベーゼンドルファーとの邂逅

2026年1月7日（水）19:00

山根一仁（ヴァイオリン）／嘉目真木子（ソプラノ）／川口成彦、兼重稔宏（ピアノ）

【山根、川口】 ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第5番 ヘ長調 Op.24 《スプリング》

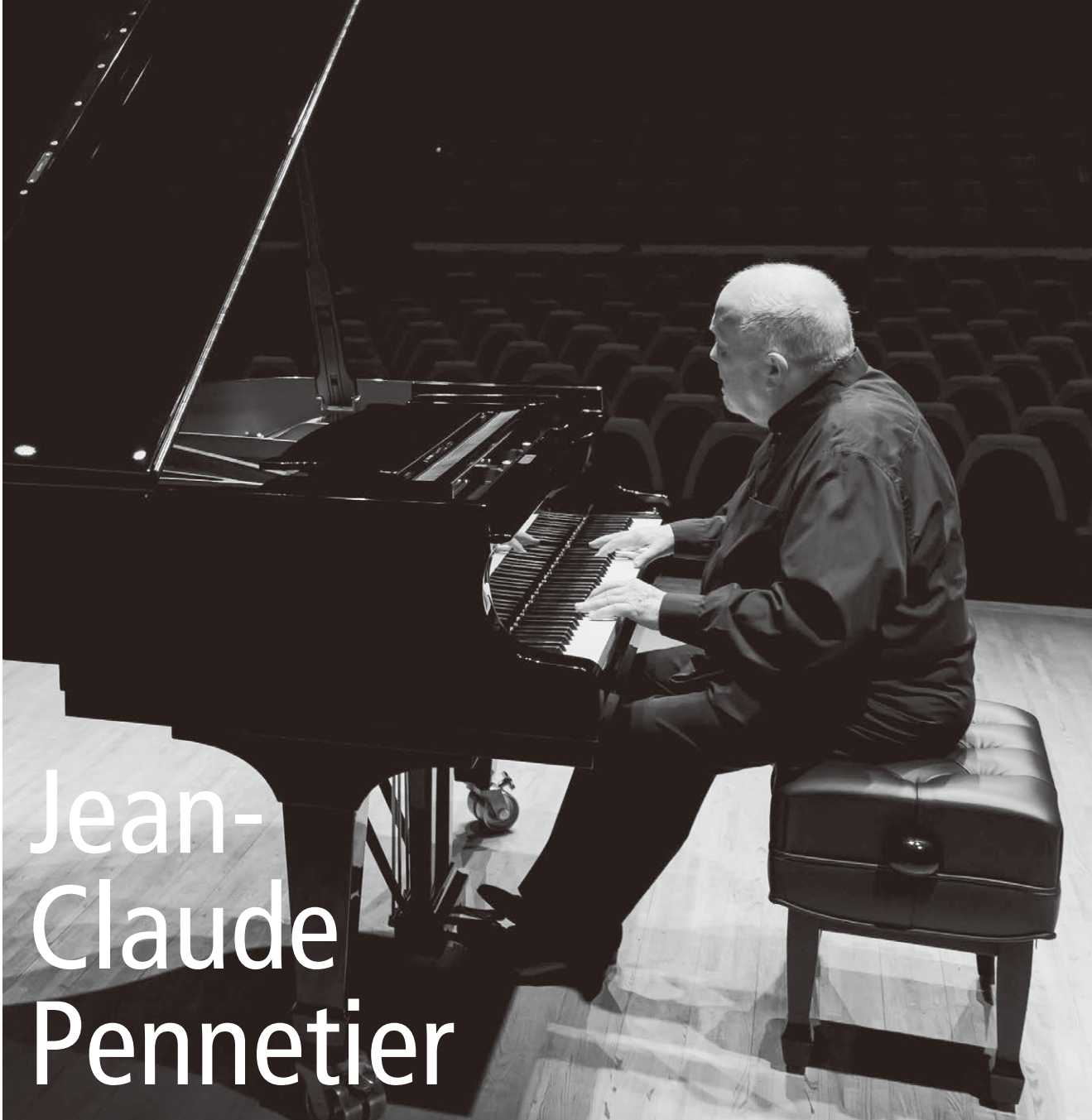
【兼重】 ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番 ホ長調 Op.109

【嘉目、兼重】 ブラームス：《5つの歌曲》より〈調べのように私を通り抜ける〉Op.105-1
ブラームス：《4つの歌曲》より〈永遠の愛〉Op.43-1
モーツァルト：クローエに K524
R.シュトラウス：《8つの歌》より〈献呈〉Op.10-1／〈万霊節〉Op.10-8

【川口】 シューベルト：4つの即興曲集 D899
ショパン：ワルツ第1番 変ホ長調 Op.18 《華麗なる大円舞曲》
ショパン：夜想曲第2番 変ホ長調 Op.9-2

6,000円／U-25 3,000円 全席指定
特別協賛：鹿島建設株式会社

残席わずか



Jean-Claude Penneret

ペヌティエ、最後の調べ——心を打つ革新 梅津時比古

AIがリードする社会

AI（人工知能）に芸術的演奏ができるか？と未来のプラグマティズムが話題にのぼっている。問いを発する状況自体が、社会の雰囲気幅広く染める。もはやAIができるかできないかの問題なんだよ、精神的営為など必要が無い、と言わんばかりに。

そうした現今の精神的状況と最も闘っている芸術家が、ジャン＝クロード・ペヌティエであることは間違いないだろう。ペヌティエは、常に美を問い直し、つくり直す。根底には、これまでの意識に漫然とつかることが精神的退廃の土壌を生み、社会の困難にもつながり、結局は芸術の未来をなくす、との厳しい認識がある。しかし、生まれ出ずる演奏は、あくまでもやわらかく、美の化身と言ってもいいほどに心を打つ。厳しい問題意識を抱え、従来の美意識に決して与さないが、それを破壊せず、新たな本質を見いだしてゆく。これこそが私たちに問いかけるペヌティエの魅力だろう。

司祭としてのペヌティエ

フランスのペヌティエは現役のピアニストであると同時に現役のギリシャ正教の司祭でもある。

2010年代からペヌティエは、異なる宗教の聖職者や哲学者に定期的に集まってもらい、「世界の寛容」をテーマに論議を重ねる一種の宗教会議を開いていた。当時、フランスは旧フランス領のマリ（西アフリカ）におけるイスラム過激派の騒乱やクーデターに手を焼いて軍を投入、フランスの街のあちらこちらにも兵士の姿が見える殺伐とした戦時体制にあった。

宗教会議は演奏活動とは別に思われがちだが、ペヌティエの中では一体化していたのだろう。「音楽も寛容に資するひとつ」とペヌティエは静けさをたたえた眼で語った。「教会での説教とピアノを弾くことは共通する部分があります」とも。

ジャン＝クロード・ペヌティエ（ピアノ）

2025年12月4日（木）19:00

シューマン：子供の情景
ブラームス：6つの小品 Op.118
ショパン：夜想曲 第3番 ロ長調 Op.9-3／第6番 ト短調 Op.15-3
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番 ハ短調 Op.111
8,000円／U-25 4,000円 全席指定
特別協賛：株式会社 安藤・間

そのころ、雪まじりの寒風が吹き付けるフランス・ナントで開かれた「ラ・フォル・ジュルネ」音楽祭で、フランスの現代作曲家、モーリス・オアナ（1913～1992）をペヌティエが取り上げたことが忘れられない。ナントの複合ビルの殺風景な一室で、ペヌティエによるオアナの演奏は、曲の内面的な本質に外の世界の荒々しい出来事が刺さってくることを確信させた。

ぼつんとしたピアノツッシモの断片から始まるオアナの無調の響きは（《解釈のエチュード》）、ペダルの操作でかすかにゆらめかせる弦の余韻や、特別に作られた2種類の定規を取り出して鍵盤の上にあてて弾くクラスターの深い響きを経て、やがて低音がうごめき、高音がたたきつけられ、狂乱と沈黙の錯綜を生む。この世で対話が成り立たないことの象徴のように。オアナがやはり旧フランス領のカサブランカ（モロッコ）で生まれた人種的な経緯も、ペヌティエの意識の内に入っていたのであろう。世界は今、ウクライナ、ガザに苦しんでいる。

最後のコンサートはTOPPANホールで

ペヌティエはコンサート活動に終止符を打つことを決意し、最後のリサイタルをTOPPANホールで行う。

2014年にTOPPANホールにおいて、ペヌティエがショパン《前奏曲》とフォーレ《前奏曲》を交互に組み合わせたリサイタルは、演奏とも啓示ともつかぬように、精神の昇華を聴き手にもたらした。おそらくペヌティエ自身も同じ体験を共有したのであろう。それ故に、ペヌティエがTOPPANホールで演奏活動を閉じたい、と思うのは充分に分かる。ペヌティエにもTOPPANホールにも感謝を捧げたい。

曲目はシューマン《子供の情景》からベートーヴェンの最後の《ソナタ第32番》まで、ペヌティエを聴くことのすべてが籠められている。

（うめづ・ときひこ／音楽評論家）

公開マスタークラス

2025年12月5日（金）17:30

2,000円／TOPPANホールクラブ会員、12/4公演購入者、U-25 1,000円 全席自由
＊詳細はWEBサイトにてご案内します

SCHEDULE

2025.11 ~ 2026.4

主催公演

TOPPANホールチケットセンター

10:00~18:00 土日祝休

03-5840-2222

日時		公演
11/	11 (火) 19:00	〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉
	12 (水) 19:00	ハーゲン・クアルテット イェルク・ヴィトマン (クラリネット) *第3夜のみ [全5公演 Part 1]
	13 (木) 19:00	特別協賛：鹿島建設株式会社
11/	15 (土) 13:00	イェルク・ヴィトマン (クラリネット) mit 青木尚佳 (ヴァイオリン) & 笹沼 樹 (チェロ) & 永野英樹 (ピアノ) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
	12/ 4 (木) 19:00	ジャン＝クロード・ベヌティエ (ピアノ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
12/	10 (水) 19:00	キリル・ゲルシュタイン (ピアノ) × 藤田真央 (ピアノ) 特別協賛：高砂熱学工業株式会社
	1/ 7 (水) 19:00	TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2026 1909年製ベーゼンドルファーとの邂逅 山根一仁 (ヴァイオリン) / 嘉田真木子 (ソプラノ) 川口成彦、兼重稔宏 (ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
2/	9 (月) 19:00	ティル・フェルナー (ピアノ) mit Trio Rizzle & 郷古 廉 (ヴァイオリン) 毛利文香 (ヴァイオリン) / 田原綾子 (ヴィオラ) / 笹沼 樹 (チェロ) 特別協賛：株式会社きんでん
	3/ 4 (水) 19:00	ベルリン古楽アカデミー I—Pure Bach II—Bach & Beyond 平崎真弓 (ヴァイオリン、コンサートマスター) クセニア・レフラー (オーボエ) / ラファエル・アルパーマン (チェンバロ) 特別協賛：株式会社 安藤・間

日時		公 演	
3/	6 (金) 19:00	ゴートイエ・カブソン (チェロ) & フランク・ブラレイ (ピアノ) ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲 特別協賛：清水建設株式会社	
	20 (金・祝) 18:00	北村 陽 (チェロ) 園田奈緒子 (ピアノ) 特別協賛：東急建設株式会社	
4/	4 (土) 18:00	アンナ・プロハスカ(ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ指揮 イル・ジャルディーノ・アルモニコ	
〈ランチタイムコンサート〉 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]			
11/	19 (水) 12:15	Vol.136	〈1909年製ベーゼンドルファーの息吹 I〉 石田成香 (ピアノ) ウィーン古典派の波動—守破離
12/	2 (火) 12:15	Vol.137	特別企画 水野優也 (チェロ)
2/	13 (金) 12:15	Vol.138	特別企画 〈1909年製ベーゼンドルファーの息吹 II〉 佐藤麻理 (ピアノ)& 瀧村依里 (ヴァイオリン)& 田原綾子 (ヴィオラ)& 築地杏里 (チェロ)

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2025年10月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています

※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

2025/26 シーズン主催公演[後期] 発売日のお知らせ



2026年		
4/4 (土) 18:00	アンナ・プロハスカ (ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ指揮 イル・ジャルディーノ・アルモニコ	12/24 発売
5/12 (火) 19:00	レオンコロ弦楽四重奏団	
5/26 (火) 19:00	ニコラ・アルトシュテット (チェロ) プロジェクト 第1夜—Duo ヨナス・アホネン (ピアノ) 第2夜—マラソンコンサート イリア・グリニコルツ、毛利文香 (ヴァイオリン) / 原 麻理子 (ヴィオラ) / ヨナス・アホネン (ピアノ)	1/14 発売
5/29 (金) 18:30	★	
6/10 (水) 19:00	トリオ・ヴァンダラー	3/18 発売
7/6 (月) 19:00	〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉 ハーゲン・クアルテット	4/15 発売
7/7 (火) 19:00	★	

※発売日は変更になる可能性があります。記載の発売日は単券の一般発売日です。
※★印はセット券をご用意しています。
※各公演の詳細はオフィシャルWEBサイトにてご確認ください。

探求心あふれる“瀬川ワールド”



瀬川裕美子が初めてTOPPANホールに登場したのは2014年のこと。誠実に音楽と向き合う姿がとても印象的で、それは今も変わりありません。2016年からは画家パウル・クレーの作品と音楽が“領域を超えて対話しあうあり方”を探る〈クレー・リサイタル〉、さらに、「この美しい音楽を一人でも多くの人にもっと好きになってもらいたい」と語り、瀬川が創るプログラムの軸にあるブーレーズ作品への様々なアプローチなど、そこには常に他にはない“瀬川ワールド”が広がっています。また、演奏だけでなく、瀬川自身が当日パンフレットに毎回執筆している文章は、彼女が持つあくなき探求心と、作品・作曲家への敬意に満ちていて、読み応えあるひとつの作品となっています。

こうしてTOPPANホールで定期的にリサイタルを重ねること7回。今回は福士則夫が1967年に書いた《5つの断片》の世界初演など、知的好奇心くすぐる刺激的なひとときとなりそうです。あふれんばかりの想いと言葉を持って臨む瀬川裕美子。緻密に織りなされてゆく音、言葉、想いを、408席の親密な空間で感じとってください。

瀬川裕美子 ピアノ リサイタル vol.11
ひとつの詩のはじまり
〈私の〉オブジェ・トゥルヴェーソナタからアンシーズへー
2025年12月6日 (土) 15:00

ブーレーズ：ピアノ・ソナタ第3番 (1955-63)
〈アンティフォニー (断片)〉 〈トロープ〉 〈コンステラシオン〉
ブーレーズ：スケッチの断片 (1987)
福士則夫：5つの断片 (1967 / 世界初演)
ブーレーズ：ピアノ・ソナタ第1番 (1946)
J.S.バッハ：フーガの技法 BWV1080より《3つの主題によるフーガ》(断片)
ブーレーズ：天体暦の1ページ (2005)
モーツァルト：ロンド K494
ブーレーズ：アンシーズ (1994/2001)
全席自由：3,000円 / 学生1,500円
主催・お問い合わせ：セガウェイ・プロジェクト 090-1106-3302

チケットのお申し込み：TOPPANホールチケットセンター

プラハの春国際音楽コンクール優勝記念——人生初のオール無伴奏に挑む！



水野優也はブレない！ 職人のような眼差しで楽譜と対峙し、共演者と向き合う。音楽的にもいい意味での頑なさがあり、周りの雰囲気にながれず同調するタイプの音楽家ではない。チェロのポジションにあって、これは極めて重要なことであり、同時に室内楽においてはチェロがそういうスタンスでいてくれることが成否の鍵を握る。

教えを乞う師をTOPPANホールゆかりのミクローシュ・ペレーニ、クレメンス・ハーゲンに選んだあたりから彼への注目度は急速に増していったが、実際にふたりの師それぞれの持ち味や良さを着実にセレクトして吸収し、自分の芸力にするあたりに非凡さを感じる。一見、活況を呈している趣の日本の若手チェロ界だが、真の意味で室内楽で活躍できるアーティストは本当に限られている。そのなかにあって近年、出演回数と頻度が増していることから我々の期待度の高さを感取ってもらえるだろう。実際、若手ピアニスト谷昂登との初共演では室内楽の経験が少ない谷を完全に対等に扱いながら、ふたりの想いを昇華させる力に目を瞠った。〈トーマス・ヘル プロジェクト〉では、ヘルとヴァイオリンの周防亮介との

3人の個性を際立たせながらも全体の調和を崩さない範囲での攻めの姿が印象に残っている。

今年5月に〈プラハの春〉国際音楽コンクールで優勝したことへのお祝いの意も含め、彼に無伴奏リサイタルでの出演を依頼したところ、師ペレーニの十八番であるコダーイ《無伴奏チェロ・ソナタ》を都内で初めて披露してくれるという。ロージャの《トッカータ・カプリチオーザ》という小品もハンガリー留学で出会った小品だ。カサドはコダーイ以上に日本の若手が弾いている作品かもしれない。水野の特徴や持ち味を知るにはうってつけのプログラム。聴き逃すと後悔しそうなコンサートだと思いがちがだろう。

(西巻正史 / プログラミング・ディレクター)

〈ランチタイムコンサート Vol.137〉 特別企画
水野優也 (チェロ) 民族と魂の対話

2025年12月2日 (火) 12:15

カサド：無伴奏チェロ組曲
ロージャ：トッカータ・カプリチオーザ Op.36
コダーイ：無伴奏チェロ・ソナタ Op.8

2,000円 全席指定

【TOPPANホールクラブ】
ゴールド会員：1枚無料 / レギュラー会員：1枚目1,500円
※2枚目以降は2,000円

表紙：イェルク・ヴィトマン

ヨーロッパ随一の人気作曲家にして、スーパー・クラリネット奏者としての顔も持つ、稀代のエンターテイナー、ヴィトマンのマルチな才能が炸裂した“個展”公演より。アイディアとセンス光るヴィトマン作品の数々と、日本の若手精鋭とのパワフルなパフォーマンスが響き合い、客席は興奮の渦に巻き込まれて、忘れたい一夜となりました。

編集後記

兼重稔宏さんと川口成彦さんへのインタビューの最後は、「AIと音楽」という大変変な話題に富むお話になりました。人間の存在意義を根源的に問う、“ルネサンスの再来”とも言える時代が来ているとのこと。生身の人間だからこそ奏でられる音色や届けられる息遣いがあると信じて

つも、AIが心を持つ時代もすぐそこに来ている説もあり、一概にAIを否定せず上手に共存していくことが求められているのかもしれない。個人的にAIさんとは、献立のアイディア出しや推しの魅力を語り合うお相手として、日々仲良くしてもらっています。(ゆ)